

沖縄全戦没者追悼式における首相の挨拶に抗議します

内閣総理大臣 岸田文雄様

あなたは2023年6月23日、糸満市摩文仁の平和祈念公園で開催された沖縄全戦没者追悼式において、「私たちが享受している平和と繁栄は、命を落とされた方々の尊い犠牲と、沖縄の歩んだ苦難の歴史の上にあります」といい、「戦後、我が国は一貫して、平和国家として、その歩みを進め、世界の平和と繁栄のため、力を尽くしてまいりました」と述べました。

一体、「戦後…一貫して、平和国家として、その歩みを進め、世界の平和と繁栄のため、力を尽くしてまいりました」とあなたがいう「我が国」に、沖縄は含まれているのでしょうか。「命を落とされた方々の尊い犠牲と、沖縄の歩んだ苦難の歴史の上にある」という平和と繁栄を享受している「私たち」の中に、沖縄の人々は含まれているのでしょうか。

平和の礎（いしじ）には、敵味方を問わず、国籍を問わず、沖縄戦で命を落としたことが判明した全ての人の名が刻まれており、その圧倒的な死者の数が、私たちに戦争の愚かさや虚しさを訴えかけています。「沖縄全戦没者追悼式」という名称そのものも、このことを如実に示しています。それなのに、あなたはなぜ、「我が国」の平和と繁栄のみを述べ、「命を落とされた方々の…犠牲」や「沖縄の歩んだ苦難の歴史」を正当化しようとするのでしょうか。4人に1人が戦禍の犠牲になったとされる沖縄の人々のうち、少なからぬ人々が他ならぬ日本軍によって殺されたり集団自決に追い込まれたりしたことは紛れもない事実であり、いかなる理由によっても「尊い犠牲」などと正当化することなどできないはずです。

沖縄は戦後27年の長きに亘り、アメリカの施政権下で銃剣とブルドーザーによって土地を取り上げられ、基地の島となり、平和を願う人々の想いとは裏腹に、ヴェトナム戦争時には米軍戦闘機の発進基地としての機能を果たしました。今なお、米軍と自衛隊の基地がひしめきあい、事故や強姦、爆音や環境破壊が止まるところを知らず、人々は恐怖と不安の中に置かれています。昨年も、沖縄の米軍基地周辺住民の血中PFAS（有機フッ素化合物）濃度が全国平均の最大14倍にも達し、河川や飲料水が汚染されていることが明らかになったばかりです（沖縄タイムス2022年10月16日）。さらに、岸田政権下においては、反撃能力（敵基地攻撃能力）の保有が閣議決定され、軍事予算が倍増されるとともに、南西諸島への長距離ミサイル配備が着々と進められており、沖縄は周辺諸国から危険視され、攻撃の標的となりつつあるのが現状です。

今般のあなたの首相としての挨拶は、安倍政権、菅政権の文言を形式的に引き継いだに過ぎないとしても、琉球王国を処分し、徹底的な皇民化教育を施して、沖縄の人々を台湾支配、日露戦争に駆り出し、その後もずっと、軍事作戦に利用し続けてきた支配者の言葉というほかありません。キリスト教ではミニストリーは牧師職を指し、神と人々に仕えるつとめを指しています。知恵を尽くし、命をかけ、遜って奉仕をする聖職者を意味します。あなたもプライム・ミニスター（総理大臣：第一のしもべ）と呼ばれるからには、支配者としてではなく、しもべとしての姿勢を示し、謙虚な言葉を使うべきではないでしょうか。

平和の礎や沖縄全戦没者追悼式は、憲法前文に謳われている「いずれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならない」という思想を体現したものであり、あなたを含め、私たちすべてが、平和を作り出すために学ばなければならないかけがえのない教訓です。「辺野古の海を守れ」「銭で県民を釣るな」との地元の抗議の声にも、しっかりと遜って耳を傾けていただきたいと願います。

2023年6月23日

日本キリスト教会大会靖国神社問題特別委員会委員長 小塩海平

（この文章は委員会として討議する以前のドラフトですが、時宜を得て皆さんにお届けしたく、ヤスクニ通信7月号に合わせて発送させていただきました）